

火星



平成20年1月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

朴の葉の落ちたる音の孔雀小屋

筥かけし泡に冬の立ちにけり

暗がりを出でし木白に笹子くる

クリスマス玉の緒の葉のくれなゐも

鋭き影に禽発ちにけり餅筵

甘酒に箸が一本山眠る

凍空に香具師が電球掛けにけり

大枯るる芭蕉の傍のあたたかし

雪晴や湯気上げてゐる杉丸太

木枯やはうれん草は紅つくし

第十二回 火星賞

丸山 照子

平成十九年度の火星賞を右の通り決定
致しました。

平成二十年一月

火星俳句会主宰

山尾 玉藻

推薦の言葉

笑ひすぎたり山茶花のこぼるるよ

いにしへの火の匂ひせり大夏野

明晰な美意識と詩的センスの働く垢抜けた作品、と言
うのがこれまでの照子俳句の印象であった。所がこの一
年、それが見事に変貌を遂げ始めた。

男山やまふところの柚子湯かな

ぼうたんへ面舵とりし飛行船

流れ橋よりつづきけり天の川

さそり座の尾の触れてゐる糸瓜棚

豊かな感性が光る作品には違いないが、その基盤は何
よりも冷静な写生眼にある。確かな実体感や臨場感が大
きな力となり、作品の方からぐんぐん迫ってくるよう
である。

砂浴びの鳥に土用の波がしら

波しぶき立つ年の瀬の葬かな

ぎんなんや瀬まず澄まず神の水

しかも、その写生眼は常に緩まず昂らず、写生を超え
た写生で重層的な世界をも詠み上げている。

たけなはと言ふしづけさの薪能

鳥籠の布一枚の明易し

還暦を迎えた照子さんが「六十代、俳句があればこわ
くない」と言われたとか。しかし道連れにするには俳句
はなかなか手強い。いよいよ気力を充実させ、覚悟の程
と志の高さを強く望んで止まない。

照子さん、火星賞おめでとうございます。

太白星

柳生千枝子

安閑として満月を待つ孤り
滝の音近付きいよ濃き紅葉
紅葉濃し仰げば天の青深く
閑居して夕陽沈める冷えにあり
翁忌の林を行けば土の香す
栗色に髪染めて来し芭蕉の忌
更けてよりいよ満月金色こんじきに

杉浦典子

烏骨鶏に水溜りあり菊日和
菊枕ゆすり均せし香なりけり

寝かせある水棹の丈や野分あと
母の忌の母に一献新走
雨音の溪へ降り込む菊脛
十月や神戸に象の子の生れし
紅葉して象の子すぐに歩きけり

浜口高子

湖霧へ男大きく餌を撒けり
湖昏れて刈畑の火の動きけり
秋灯の斜に流るる鞍馬川
水の月生る一棹に舟離れ
枯蓮としよりたちのよくしやべる
枯蓮中の一本青きこと
わらびもち匙にぷるんと枯深む

火星作品

山尾玉藻選

三山のこよなく晴れし穴惑 大和郡山 城孝子

病人の足見えたり鴝の晴

障子貼り替へつまらなき夜なりけり

深空より松葉降りくる角伐会

朝寒の駅を出で来る弓袋 八幡 大山文子

昼網の糶に間のある秋扇

鶺鴒の走りおのころ島霧る

子午線を少し外れし海桐の実

川風に吹かれすぎたる種茄子

昼網の羅の短し酔芙蓉 神戸 深深澤鱻

須磨浦や潮入ればはる初嵐

海鳴りに山鳴り添へり二十日月

嘯み当てしとんぶりに酔ひ重ねけり
菊食うべ在所の兄のよく眠る
葬送や峡の刈田に水溜り
聖職を退きたる人の菊咲けり
白抜きの新酒ののぼり旧街道
無花果の匂ひ流るる昼の月
一升餅初孫かつぎて転ぶ菊の晴
ほんたうは日差しが嫌ひ曼珠沙華
いろいろな帽子来てゐる破蓮
遠見えて稲田へおりる観覧車
山に山影して暮るる鳥威
実石榴の割れゐる昼の郭町
舟頭の腰に老い見ゆ豊の秋
船頭の耳の遠さも十三夜
舟べりは葦の穂かむる安土なり
陶片の縞のゆらゆら水の秋
十五夜の地球の裏から来いと言ふ

姫路 高尾 豊子
八幡 坂口 夫 佐子
宝塚 河崎 尚子

選のあとに

山尾 玉藻

病人の眼に運動会きこゆ

城

孝子

孝子さんのお身内に重篤の方がおられ、快癒の希望が余り持てないと聞いている。折から病院の近くの学校より運動会の様々な音が届き、病人の虚ろな眼が少し反応したのである。窓外の明るく活力溢れる響きが、病室の空気をいよいよ暗鬱とさせるようで、悲しみを誘う。直截的表現がその場の徒ならぬ雰囲気を引きよく伝え、一層強くこころを打つ。

朝寒の駅より出で来る弓袋

大山

文字

「弓袋」は日本古来の弓でも洋弓でもどちらでも良いが、持ち主はやはり若者が良い。凛々しい姿は「朝寒」の駅の景にいかにも相応しく、文字さんを大いに納得させたのである。この句は明石吟行で詠まれたもの、それも早朝集合した明石駅の句である。仲間の多くは未だ作句モードに入っていないかつたであろうが、本当は家を出た瞬間に吟行は始まっていなければならない。文字さんはそれをしっかりと心得ていた。

菊食うべ在所の兄のよく眠る

深澤

鱻

鱻さんの故里は新潟である。彼の兄上は新潟を離れず永年家を守って来られ、また幾度も大きな震災に遭遇されている。当然、鱻さんの兄上に対する思いは熱い。久し振りに帰郷し

た弟と嬉しいお酒が少し過ぎたのか、兄上は健やかな寝息を立てて居られる。「菊食うべ」と述懐するところの色がしみじみと宜しく、兄への深い尊敬と情愛を静かに述べて余りある。

葬送や峡の刈田に水溜り

高尾

豊子

清浄な空気としんとしたところに満ちた句である。侘しい「刈田」に自然の優しさとも言うべき雨水が溜った景に、豊子さんのちよつとした人生観が窺えるからであろう。実を確かにおさえているので、上五の「葬送や」に外連味がない。

ほんたうは日差しが嫌ひ曼珠沙華

坂口夫佐子

日まみれの「曼珠沙華」を「ほんたうは日差しが嫌ひ」と感じた所に、夫佐子さんの感覚の冴えを覚える。言われてみれば、曼珠沙華の妖艶さは夜闇にこそ際立つものなのかも知れず、意表外な感じがおこらない。ストレートな感情描写で、「曼珠沙華」の本意に意外な面から迫っていると云える。

十五夜の地球の裏から来いと言ふ

河崎

尚子

最近、尚子さんは遥かアメリカまで娘さんの出産の手伝いに行つて来られた。しかし掲句を解する上でそんな予備知識は全く必要ない。句意は単純明快、名月の夜に日本の裏側に位置する国の人から誘いをかけられたのである。「十五夜」の季語が絶対で、冬の月や夏の月では駄目、まして春の月では句が全く成立しない。リアルな「十五夜」であるからこそ、一句に張りや弾みをもたらせたのである。(以下略)

恒星圈

同人 I

河崎尚子

木犀の香のとどきたる遊女塚
御霊水は煮沸すべしと櫛紅葉
泡立草引き込み線のまぶしかり
跳ね橋の上るを待てる秋日傘
釣人に雁の棹くづれけり

加古みちよ

木野本加寿江

亡き夫に孫一人増ゆけふの月
松手入終へたる足の下りて来し
藤袴心定まるとき淡し
秋風の入り来る戸口より出づる
月光の作るわが影なりしかな

地の神の屋根に鶉来て暗きゐたり
庭闇のちちろの声に眠りけり
虫の声のひときは眠り誘ひけり
長月の波きらきらと陽を返す
雨の日の菊の香籠る仏間かな

金澤明子

小林成子

枯を来てサンドイッチに添ふパセリ
秋灯の暖簾をすいと二人連れ
夜の色となる酒藏の温かさ
二代目の後姿の松手入
木犀は早や姿よし松手入

水音に逆らはずゆく曼珠沙華
日時計の針となりたる秋思かな
きざはしにきざはし交す雨の萩
飯盒の凹み揃へば鳥渡る
一瞬にくづる円陣野分晴

獅子座

山尾玉藻推薦

奥田順子

兎の眼うるんでみたる厄日かな
灯を消してよりの親しき秋の雨
近江路も越路も雨の刈田かな
巻き上げし秋簾より呼ばれけり

松井倫子

秋の蛇なぞへに絡み合ひにけり
それぞれに帰り路ある良夜かな
話題にし十月桜さびしめり
冬ちかし名水満たす大薬缶

渡邊美保

日時計に温みありけり糸のこ草
紅葉して雨誘ひをり箒草
踏み石のその先消ゆる乱れ萩
やがてまた人の立ちゐる金木屋

村上留美子

姉と思ふ檀の実成る日数かな
土手の自転車秋空を駆けるごと
豊の秋デイーゼルカーの窓灯る
終点のホームは秋の没り日色

前田忍

舟蔵に人の声あり日短か
風見鶏少し廻りし良夜かな
子午線の町へ降りたつ秋日傘
昼耀の終りし台の秋日かな

助口弘子

紅葉して昔は鬼女の棲みし山
松手入終へし堅田に灯のともる
鹿の目の潤み大和の秋深む
秋燕の寺に写経を納め来し

白数康弘

月光の中に錨を下ろす船
良夜かな座りてなにをすでなく
水玲瓏と満月の夜を流れけり
月明し鬱のままなる樟と檉